2026-2027
WEEKLY BULLETIN
札幌東ロータリークラブ TODAY'S PROGRAM

■本日のロータリーソング
な　し

11月12日(木) 第15号
第3178回 例会



(移動例会)職場訪問 職業奉仕委員会

12:00～(於)札幌オリンピックミュージアム

ポリオの記憶を、未来の行動につなぐ

(国際ロータリー財団強化月間に合わせて、ポリオについて知ろう)

遠田 学 ロータリー財団委員長

本年度のロータリー財団募金強化月間にあたり、財団活動の重要な目的の１つであるポリオ根絶についてお話しします。ポリオ(急性灰白髄炎)は、ポリオウイルスによる感染症で、かつて「小児まひ」と呼ばれました。主に感染者の便で汚染された手指、水、食物を介して口から感染し、特に５歳以下の子どもがかかりやすい病気です。感染者の９割以上は無症状か軽症ですが、ウイルスが神経系に侵入すると手足に麻痺を起こし、呼吸筋が侵されれば命に関わります。特効薬はなく、予防にはワクチン接種が最も有効です。

日本では1961年にワクチンの集団接種が始まり、野生型ポリオウイルスによる患者は1980年の症例を最後に確認されていません。世界でも、1988年の世界ポリオ根絶推進活動(GPEI)発足以降、症例は99.9%減少しました。しかし、アフガニスタンやパキスタンでは野生型ウイルスの伝播が続き、接種率の低い地域ではワクチン由来ウイルスも課題です。世界的な根絶が達成されるまで、予防接種と監視を止めることはできません。

ロータリーの取り組みは、1979年にフィリピンの約600万人の子どもへワクチンを届けた事業を契機に発展しました。1985年に「ポリオプラス」を創設し、1988年にはWHO、ユニセフ、米国CDCなどとともにGPEIの創設パートナーとなりました。これまでに29億米ドル以上を拠出し、122カ国、30億人を超える子どもの予防接種に貢献しています。国際ロータリーが会員の力と社会への働きかけを結集し、ロータリー財団が寄付を予防接種、監視、啓発活動へつなげています。

日本でポリオの記憶が薄れつつある一方、その恐ろしさを物語るのが1960年の北海道大流行です。北海道衛生部の『北海道ポリオ流行史』によれば、道内では患者1602名、死者127名、後遺症児800名を数え、全国患者5512名の約３分の１が北海道に集中しました。中心地の一つが夕張市鹿島地区、当時の大夕張です。炭鉱鉄道が主な交通手段という隔絶された地域に約19000人が暮らしていましたが、５月に約90名の患者が発生し、感染は半年ほどで道内へ広がりました。

当時はワクチンも医療設備も圧倒的に不足しており、対策は限られたソークワクチンの接種、消毒、患者の隔離収容が中心でした。重症化した乳幼児は呼吸麻痺を起こし、自衛隊のヘリコプターや救急車で札幌へ搬送されました。人工呼吸装置「鉄の肺」は数が足りず、停電時には医療者が手動で動かし続けたと伝えられています。患者宅には「小児まひ患者の家」と書いた紙が張られ、集会は禁止されました。感染に気づかず親戚宅へ避難した人が別の地域で発症し、流行を広げる例もあり、家族と地域社会は大きな恐怖と悲しみに包まれました。

この惨状が世論を動かし、翌1961年、九州でも流行の兆候が見られるなか、厚生省はソ連とカナダから経口生ワクチン1300万人分を緊急輸入しました。乳幼児を含む全国一斉接種により感染は急速に収束し、1963年の北海道の患者は２人にまで減少しました。1964年には国産ワクチンによる定期接種が可能となり、日本はポリオを克服する道を歩みました。

この経験を知る医師で詩人の故河邨文一郎氏は、1988年の記事で、大夕張からの帰途、炭鉱列車に乗り込んできた母親たちの訴えと泣き声、鉄の肺の不足で亡くなった子どもたち、米国から呼吸器が届いた際の感激を回想しました。そしてポリオプラスを、ポリオを乗り越えた国々から、今なお苦しむ国々と未来の子どもたちへの「贈り物」と表現し、大事業を成し遂げようと呼びかけています。

根絶活動を途中で止めれば、専門家のシミュレーションでは10年以内に世界で年間20万件以上の新規症例が生じる大規模な再流行の可能性があります。ポリオ根絶はあと一歩ですが、その一歩には、最後の一人までワクチンを届け、感染を監視し、地域の理解を得る粘り強い活動が欠かせません。かつて北海道の子どもたちと家族が経験した苦しみを、世界のどこにも繰り返させないことは、歴史を知る私たちの責任です。

私たち１人ひとりの寄付は、ワクチンとなり、医療従事者を支え、子どもたちの未来を守る力になります。ロータリー財団への理解を一層深め、引き続き温かいご支援とご協力をお願いいたします。世界中の子どもたちに「ポリオのない未来」を贈るため、この大事業を最後までともに支えてまいりましょう。